
NARUTO ~ 月の中には白ウサギ ~

P なっつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO〜月の中には白ウサギ〜

【Nコード】

N4880Y

【作者名】

Pなつつ

【あらすじ】

記憶喪失の少年、あかめハクトが自らの生い立ちの謎に迫ったり、迫らなかつたりするサスペンス忍法活劇。

この小説はオリジナル要素を多分に含みます。
閲覧される方はご注意ください。

開幕―とある研究室にて―（前書き）

初投稿となります。

至らないところなど多々あると思いますが、よろしくお願いします。

開幕―とある研究室にて―

とある地下の一室。

幾重にも張り巡らされた罫を越えた先にあるそこには、クナイや巻物、さらには用途の分からない物までが乱雑に積まれ、混沌とした様相を呈していた。

壁には等間隔に蠟燭が設置されていて、その明かりは不規則に、そして不気味に揺らめいている。

部屋の中央にはガラス製の筒。毒々しい紫色の溶液で満たされたそれは、その中で浮かぶ生物を冷たく包んでいる。

人間の赤ん坊を基礎として、ありとあらゆる生物の部分を付け足したら完成したようなそれは、どこか寂しげな光をその拳程の大きさの瞳に宿していた。

縦に長く伸びた部屋の最奥、古めかしい木で作られた椅子。そこに男は座っていた。

僅かな光源で照らされた顔は病的に白く、その漆黒の髪は女のように艶がある。

巻物に一心不乱に文字を書き込む姿はどこか研究者然としていて、蛇のように鋭い眼は狂気の光を孕んでいた。

ふと、何者かの気配に気付いた男は手を止め、部屋の戸へと視線を移した。

音もなく戸が開く。

現れたのは未だ10に満たないであろう少年。暗闇に映える白髪、あどけなさの残る幼い顔。細かな意匠の施された儀礼服は胸元が大きく開き、蠱惑的だ。

少年はゆつくりと血色の良い唇を開いた。

「ダメだよ。駒はもつと強いのを置いとかないと。ココにあるのって一応御禁制のモノなんですよ？」

響いた声は声変わり前のもので、場違いといった印象を受ける。

「被検体の数も無限ではないのだから、私に会いに来るたびに破壊するのは止めてもらえるかしら…」

心底迷惑、といった感情を隠すこともなく表情に浮かべた男は、顔を苦々しげに歪めた。

懷から古びた巻物を取り出し、恨みを晴らすかのように勢いよく投げつける。

「ありがたく受け取っておくよ。今回の粗方話は繋がるだろうか、もう会いにくることはないかもね。寂しいなあ」

「あら、それは残念だわ。でも、よくも飽きもせず遊びが続いたものね…。何の魅力も感じられないのだけれど」

「遊びだなんて心外だなあ。ボクは至って真剣なのにさ…。でも、ボクからしたらアンタの研究の方が無意味だよ。特に何の魅力も感じられないね」

意趣返し、とでも言うように、少年は男の台詞をそのまま返す。

「価値観の相違…とでも言えばいいのかしら。これ以上不毛な論争を続ける気はないわ。早急に去りなさい」

「ちえー、つまんないの。せっかく面白いモノ見せてあげようと思つてたのに」

そう言つて、広い袖口から取り出したのは一振りの剣。

刀身は錆び付き、刃こぼれが目立つ。

礼式用の物なのだろう、元は莊嚴華美であつただろう装飾は、今は所々が擦り切れており、酷く貧弱な印象を受ける。

少年は、愉快そうに剣を摘みあげ、自らの目の高さの位置で固定した。

「それが例の”遺産”かしら…実在していたとはね」

「まあね。以外と大昔の、それも文明が発達した直後のお話つてのはホントなんだよ。昔の人は見たままの事を書くから。それに、時代を跨いでないから事実が歪曲するなんて

ことも絶対に無いしね。一から落書きみたいな文字を解かなきゃなんないつてのがネックだけど」

「それで…その剣ならできるのかしら。完全なる死者蘇生を…」
男の口から蛇のように長い舌が飛び出し、唇の渴きを癒すように舐める。

「いんや、これだけだとただのボロツちい剣だね。完成にはさらに玉為す一振りつてのが必要になってくんの。それにさ、ただボロ剣二振り揃えりゃいいってもんじゃない。ちゃんとふ

さわしい場所で、しかるべき手順を踏んでようやく発動すんの」

「それに…」と、少年は言葉を続ける。

「アンタのいう死者蘇生とコツチの死者蘇生は全くの別モノだよ。定義からして全然違うからね。肉体の復活って事だけに絞るんならアンタが今研究してる事の方が適してるよ」

「そう…術式の構成に利用できないかと思っていたのだけれど。まあ、いいわ。アナタのおかげで研究が進んだ事は事実だし、文献の対価は必要ないわ」

「そりやどうも。それじゃボクはそろそろ行くよ。じゃあね」

「ええ。さようなら」

男が言葉を返すと同時に、少年の姿が音もなく消え去る。

コポコポ、と部屋の中で浮かぶ生物の呼気が水泡となって水面へと浮かび上がる。

男は手元の巻物に何事かを書き綴ると、生物への興味的一切を無くしたように部屋を後にする。

やがて、音が消失する。

生物はその醜悪な肉体を抱きかかえるように丸くなり、冷たい水底へと沈んでいった。

第一幕―第7班結成―

子供達の喧騒に包まれる教室。

あかのめハクトは、目にかかる白髪を鬱陶しげに払いのけ、その紅い瞳で同級生達を見渡した。

皆落ち着きがない様子で、何事かを友達と話している。

その中の一人がおもむろに木の葉マークの額あてを掲げた。自らが木の葉の忍びである証。

昨日のアカデミー卒業試験の合格者達に配られたそれは傷一つない新品で、自分達が未だスタート地点に立ったばかりであるということとを再認識させるようだ。

よく見ると、周りの生徒達も皆一様に額あてを身に着けている。

それもその筈、今日はアカデミー卒業生達への説明会が行われるのだ。

説明開始の時刻まではまだいくらか余裕があり、まだ会場にいない生徒もこれからくるのだろう。

少し早く来すぎた、とハクトは時間の潰し方を模索する。

不意に、女子達の悲鳴に近い叫び声が響いた。

都合よく問題が発生したことにハクトは内心ほくそ笑みつつ、騒ぎの方へと視線を移す。

あかのめハクトは退屈が嫌いである。三度の飯より事件が好き、と言っても過言ではないこの少年は、その取扱いの難しい性格で同年代の中ではどこか浮いていた。

どこかで問題が起きるたびに行つて、傷口を拡大させるのだ。火影の顔岩に落書きが発生すれば、厳頑そうな顔に口紅を塗りたくる。

櫓の上から女湯の覗きに興じていた白髪の大男を蹴り落とし、間接的に始末するなど。

幾多の前科持ちであるハクトは、今回もどうやってこの場を混乱さ

せてやるうかと、一人意気込んでいた。

結論から言おう。

金髪と黒髪が熱いベ―ゼを交わしていた。男同士である。

「しゃーんなろー！死ぬ、バカナルトオ！」

桜色の髪の少女が右腕を大きく振り上げ、鈍い音と共に金髪が地に沈む。

教室が女子達の歓声に沸く。

そこで唐突に戸が開かれた。

「皆揃っているか、説明を始めるぞ」

二の手を邪魔されたハクトは無然とした表情のまま顔を向ける。

現れたのはハクトの良く知る顔だった。

うみのイルカ。アカデミーの教師である。

泰然と教卓へと歩む姿は、まさしく教師といったようで様になっている。

フラフラと頼り無い足取りで金髪が席に着く。

ぐるりと教室全体を見渡したイルカは一度頷くと、ゆっくりと明快な調子で話し始めた。

「まずはみんな、卒業おめでとう。あの試験を突破できたのは、ひとえに日頃の努力の成果だ。さて、忍者となった君達にはこれから里から任務が与えられるわけだが、今後は三人一組みの班を作り、各班一名ずつ付く上忍の先生の指導のもと任務をこなしていくことになる」

教卓を手の甲で数度叩くと悠然とした口調で告げる。

「班は力のバランスが均等になるようこつちで決めた」

まわりから不満の声があがるも、イルカは取り合わない。

「それじゃ1班から…」

手元の資料に視線を移すと班を発表していった。

次々に班が発表されるなか、ハクト特に何の感慨も浮かばず、一喜一憂する同級生達を眺めていた。

「次は、7班だな。まずは…うずまきナルト、春野サクラ」

「やったつてばよ！」

快活そうな声、オレンジ色のパーカーに小柄な体格、うずまきナルトは澄み渡った青空のような瞳を爛々と輝かせ、雄叫びを上げた。一方、それとは対照的に春野サクラは鬱々としたオーラを纏わせ、肩を落とす。

「次、うちはサスケ」

一転、春野サクラの表情が喜色満面となる。

黒髪を逆立てた少年、うちはサスケは二人の名前を聞いて小さく舌打ちをした。

（足手まといが二人も…）

「イルカ先生！！！よりによって優秀なこのオレが！なんでコイツと一緒にの班なんだつてばよ！」

「まあ待て、ナルト。まだ発表は終わってないぞ」

ナルトを諫めて、イルカは言を続ける。

「四人目、あかのめハクト」

心底面白い、といった表情を浮かべたハクトがイルカに問いかける。

「イルカ先生。三人一組じゃなかったんですか？納得いかないんですけど」

「ああ、ナルトのと合わせて説明する。まず、今回の卒業試験の合格者数は28人。そして、班は力のバランスが均等になるように組まなきゃならない。ドベのナルトに主席のサスケ、中堅どこのお前とサクラを入れて他の班と同格と判断した」

「なるほど…」

一応納得したという旨を返す。

「それじゃ担当上忍の方が到着したらその先生の指示にしたがつてくれ。以上で説明を終わる」

●●●

先程の喧騒は何処へやら、ガランとした教室で未だ到着しない担当上忍を7班の面々は待っていた。

（あー暇だよ… ホントに。いつになったら来るのかな。我らが担当上忍は、さ）

ハクトが他の班員を確認すると、やはり皆苛立っているらしい。

ナルトは黒板消しをドアに挟んでいるし、サクラは止める素振りを見せながらも口元は三日月型になっている。

サスケは先程からしきりに貧乏ゆすりをしている。

（はぁ、ヒマヒマヒマヒマヒマ。これは割とホンキで制裁加えないとボクの気が済まない）

ハクトはまだ見ぬ担当上忍への恨みを蓄積していく。

そこで、ドアが開き、入ってきた人物の頭にナルトの仕掛けた黒板消しが落下する。

もちろん躲すだろうという大方の予想を裏切って、間抜けな音と共に白い粉塵が舞った。

「きやはははは！引つかかった！引つかかった！」

「ごめんなさい先生。私は止めたんですがナルト君が…」

「ありゃ、ホントにかかったんだ…」

三者三様の反応を示す。

言を発しないサスケもどこか猜疑的に上忍を睨んだ。

（これで本当に上忍なのか…？）

そんな中、髪に付着した粉を手ではたき落とし、上忍はやおら口を開いた。

「んーなんて言うのかな。お前らの第一印象はあ…」
カッ、と目を開き宣言した。

「嫌いだッ！！」

場所を移動してアカデミーの屋上。

初夏の日差しがチリチリと肌を焼く感覚に、ハクトは不快な表情を浮かべた。

黒板消しが頭に直撃した事に溜飲を下げた第7班であったが、「お前ら嫌い」宣言により場は凍りついた。

無言のまま先陣を切って歩く上忍に、7班一同は内心戦々恐々としていた。

もつとも、ハクトは遅れてきたお前が悪いといった風に、中々に不遜な態度であったが。

「うーん、そうだな。まずは自己紹介から始めようか。好きなもの、嫌いなもの、将来の夢、あとは趣味ってとこだな」

先程の険悪さを全く感じさせない声色で、上忍は言った。

腐つても大人。ガキのイタズラだと割り切っているかのように晴れやかな顔をしている。

「あのさ！あのさ！先生から言ってくれてばよ！」

「そうね、見た目ちよつと怪しいし……」

「んーオレか？オレははたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気は無い。将来の夢って言われてもなあ……まあ、趣味はいろいろだ」

良好な対人関係の形成に必要なのは何か、その前にちゃんと自己紹介をしろ、と7班の面々は毒づく。

もともとこのはたけカカシとかいう上忍が、アカデミーで見てきた面倒見の良い先生達とは対極の存在であることは、自分達を待たせておいて未だ何の詫びも無いことから感じていた。

しかし、担当上忍ということは師弟の関係になるということである。明らかに人選ミスである、と声高らかにアカデミーに乗り込みたいハクト達であった。

自らの評価が地へと垂直落下していることにも気付かず、カカシはナルトに自己紹介を促した。

「んじゃ、右のやつから順にお願い」

座っている位置的に一番最後であるハクトは、これから仲間となる班員の顔と名前を再確認する。

「オレさ！名前はうずまきナルト！好きなものはカップラーメン、将来の夢は火影になることだってばよ！それで、里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！」

うずまきナルト。この名前をハクトは随分前に聞いたことがあったのを思い出した。

火影の顔岩に落書きした奴の名前がそうだった筈だ。

生憎クラスが違ったために顔までは知らなかったが。

しかし、

（なんかコイツといると問題事ばっかで退屈しなそうだね。ボクの第六感がビンビン感じてるし、こりゃ楽しくなりそうだね）

「はい、次」

「名はうちはサスケ。嫌いなものならたくさんあるが、好きなもの別れない。それから…夢なんかで終わらすつもりはないが野望はある。一族の復興とある男を必ず…殺すことだ」

神妙な面持ちのまま、面々は固まる。

沈黙を破るように、カカシは続きを促した。

「そんじゃあ隣の女の子」

「私は春野サクラ。好きなものはあ…てゆーかあ…好きな人は…えーとお、将来の夢も言っちゃおうかなあ」

そして一息。

「嫌いなものはナルトです！」

自らが気になる女の子に宣言され、ナルトは落胆した。

「んじゃ、最後」

カカシがハクトを見る。

同様に、これまで話した事のない人物に興味が沸いたのだろう。

三人ともハクトに視線を向けた。

ふう、と息を吐き、ハクトは言を發した。

「ボクはあかのめハクト。好きなものは麦チョコ、嫌いなものは退屈だね。将来の夢っていうよりは目標って言った方が近いかな。自分の記憶を取り戻すってのが今の課題だよ。」

何でもない事のように言い放ったハクトに、あらかじめ事情を知っていたであろう力カシを除いた三人は耳を疑う。

あかのめハクトは記憶喪失である。

木の葉の里近郊に倒れていた所を暗部に保護され、意識を取り戻したときには既に失っていた。

自分が誰であるのか、何故あそこに倒れていたのか、保護者はいないのか。

人間の記憶の痕跡を探る事に造詣の深い、山中家の手を借りてもそれは同じだった。

しかし、一つだけ憶えていることがあった。

それは、自らが忍びの術を行使する者であるということ。

結局、三代目の深い温情により処分ということは免れたハクトであったが、未だ一部の者には他里の者ではないかと警戒の目を向けられていた。

チャクラの扱うことのできない一般人と忍びとでは、単一における危険度の度合いが違う。

忍びの用いる忍術とは単体攻撃用の物から、極めて広範囲に効果を及ぼす物まで多種多様に存在する。

だからこそ、里の警備に人員を割いているのだ。

たった一人の侵入者を見逃した事で里が壊滅するといった可能性も零ではないのだから。

現在、ハクトは三代目の庇護の元、アパートの一室を借りて生活している。

記憶が無い事を煩わしく感じることは多々あれど、普通に生活していく上で不自由だと思ふことはなかった。

そして、生活を保障してくれる三代目に恩義を感じていることも事実であった。

名を失った彼に、仮初と言えども新たな名をくれた事も多分に含まれていた。

アカデミーに通い忍者の道を志したのも、貰った恩は返そうという彼なりの感謝の表れである。

「まあ、別段不便な事はないよ。衣食住は火影様に提供してもらってるし」

凍りついた空気を払拭するかのように、ハクトは言った。

「ま！ともかく…だ」

さしものカカシも暫し逡巡したもの、言を繋ぐ。

「明日からこの五人で任務やるぞ」

「はっ！どんな任務でありますか！！」

任務という言葉に反応したのか、ナルトが幾分元気の戻った声ではしゃいだ。

突然、カカシが不気味に笑い出した。

確実に聞く人を不快にさせるであろうそれは、嫌に耳に残る。

「ちよつと、なんなのよ！任務って！？」

いつまでも喋らないカカシに焦れたのか、サクラは声を荒げる。

「いや…ただ、オレこれ言ったらお前ら絶対引くから。まあ…いいか」

誰かのゴクリ、と唾を？む音が聞こえる。

班員の顔をぐるりと見渡した後、カカシは、

「卒業生28名中下忍と認められるのはわずか10名。残り18名は再びアカデミーへと戻されることになる…超難関試験だ！」

全員の顔が強張ったのも当然であろう。無事卒業できたと思ったらそれは第一関門、さらに過酷な試験が粒を振るい落とすザルが如く存在したのだから。

カカシの顔が満足気に緩む。

「そんじゃ、詳しい事はプリントに書いていたから。忍び道具一式持って第三演習場に集合。あと飯は抜いてこいよ、吐くから」

喜色満面といった顔でカカシがプリントを配り始める。

ニヤニヤと笑う姿は狙ってやっているのではないかと思えるほど、
神経を逆なでしてくる。

この時、結成後初めて班員の思いが合致した。

ああ、このム力つくツラをぶん殴りたい、と。

第三幕―下忍選抜試験―（前書き）

とりあえず、この回から主人公SUGEEが発動します。

第三幕――下忍選抜試験――

朝。

窓から差し込む一筋の光によって、あかのめハクトの意識は覚醒した。

数えるほどしか家具の無い室内は、部屋自体の広さをより拡張して錯覚させる。

おもむろに起き上がり、こつた肩をゴキリと回す。

窓から入る光量の多さを不審に思い、壁に掛けられた時計へと視線を移す。

時刻は9時50分。

数少ない家具のうち、その中でも一際存在感を放つ、年季の入った机の前へ。

小奇麗に整頓された机上から、一枚のプリントを摘み上げた。

デフォルメされた力カシが持ち物、時刻などの注意時刻を指している。

もう一度時計へと視線を戻す。

集合時間――10時00分。

「あつ、やば……」

しばし無言で固まったハクトであったが、緩慢な動作で身支度を整え始める。

押入れから見慣れたチャイナ服を引っ張り出す。

着替え終わると、茶箆筥の中から惣菜パンを取り出し齧り付く。

ハクトには確信めいた何かがあった。

あー、アイツ絶対遅刻してくるわ、と。

第三演習場は自然の中に作られた人工物である。

不自然に整地された区画。周囲を森に囲まれたそこは、不思議なこ

とに景觀を壊していないと思える場所であつた。

風で揺れた大木がざわめく音は、騒々しくも、どこか安らぎを感じさせる。

手裏剣術の修行に使われたのであろう的は、真ん中から二つに割れて至る所に放置されていた。

休憩中にと作られた切り株の椅子に腰かけ、第7班の班員、うちはサスケは眉間に皺を寄せ、ぼやいた。

「遅いッ……」

こぼれた言葉は葉擦れの音に掻き消え、誰にも聞こえないと思われたが、近くに居た少女の耳には聞こえたようだ。

「そうね……てゅーか力カシ先生はともかくとして、ハクトはなんで来ないのよ!？」

現在の時刻は10時20分。

個人的には余り好きではないサクラと同意見ということが癪ではあつたが、同じ疑問を抱いたサスケは余り面識の無い少年——あかめハクトについて思考を巡らせた。

元々、クラスが違う為に会うことは殆どと言って良い程無かつた。

会話した事などは皆無である。

班のバランスを取るためにこの班に加えられたのなら、それこそ有象無象。特に特筆することなど何も無い忍びなのだろう。

だが、サスケはその有象無象に引つ掛かりを覚えた。

（何だ、何かがおかしい……。確かに奴とはほとんど会つたこともない、だが……何故奴の術を使った姿を思い出せないッ……!）

うちは一族の生き残り。この事実サスケに巨大なトラウマを擦り付けた。

周りの期待と同情の混じりあつた視線。自らの力とは釣り合わない、しかし達成しなければならぬ己が悲願。

些末事ですら折れてしまいそんな脆弱な精神を奮い立たせ、サスケは貪欲に力を欲した。

アカデミー内では主席の地位に座すも、それに甘んじて忍びとして

の技術の吸収をやめることは無かった。

同学年の生徒からも技術を盗もうと、それこそ万年ドベのナルトから次席の者まで全ての生徒の実力推し量った。

他者と自分の違いを客観的に比較し、よりチャクラ効率の良い術の扱い方を模索した。

その際に、どのような者でも一度は術を行使する姿を観ているのだ。しかし、ハクトのところだけ記憶に靄がかかったかのように思い出せない。

まるで、なんらかの力で阻害されているかのように。

思考の渦から吐き出されたサスケは、二、三度頭を振ってその考えを打ち消す。

（何を考えているんだオレは…。結局は足手まといが三人になっただけじゃないか）

ふと、頭を上げると、目に付くのは白髪の少年が悠然とした足取りでこちらへと歩む姿。

腕の時計を見ると、10時40分。

集合の時刻をとくに過ぎているというのに、微塵も焦りは感じられない。

「おはようだってばよ、ハクト…」

随分前から待っていたのだろう、普段よりトーンの低い声に不覚にもサスケは哀愁を誘われてしまう。

「おはようさん。ありゃ、カカシ先生は…あーやっぱり来てなかったね」

まるで予測済みだともいうような返答にサスケは、その可能性に気付けなかった過去の自分を叱咤した。

時刻は11時00分。朝から何も食べてこなかったために油断すると腹の虫が鳴ってしまいそうだ。

ナルトとサクラも表情からその色が見て取れ、サスケの中に若干の仲間意識が芽生えた。

が、裏切り者が発生する。

ハクトの口元には目玉焼きでも食べたのだろうか、ソースの跡が微かに残っている。

自分達が耐え忍んでいるというのに、と逆恨み甚だしい思いが生まれ、サスケは思わず追求してしまう。

「おい、ハクト…。お前もしかしくなくても朝飯を？」

「うん。もちろん食べてきたよ」

「そうか…」

にべもなく言い返されてサスケの口が閉口する。

そこに、すべての元凶が急ぐ素振りも見せずに歩いてくる。自然と、ハクトを除いた三人の手がホルスターへと伸びる。

「やー諸君、お早よう」

悪びれもせず言い放った様をみて一斉に投擲した。

「って、危なッ！！」

とつさに盾にした赤表紙の本がズタズタに引き裂かれたことで、三人は少し溜飲を下げた。

酷く憔悴したような顔で、本のだ真ん中に開いた風穴を擦りながら、カカシは切り株の上にタイマーをコトリと置いた。

「よし、12時セットOK！」

懷をゴソゴソと探り、おもむろに取り出したそれを摘み上げ、疑問だらけの顔を浮かべた生徒達に宣言する。

「ここにスズが3つある。これを昼までにオレから取り上げればいい。ノルマは一人一つ、すなわち最低でも一人はアカデミーに戻ることになるわけだ」

ゴクリ、と全員が唾を？む。

「スズ取った奴には報酬として、宝仙堂の一日限定10個の超激レア弁当を支給するぞ」

ぐー、とどこからともなく腹の音が聞こえる。

朝飯を抜いてこいとはこの為か、とハクト除く三人は絶対にスズを

取るという決意を固める。

右手でスズを弄びながら、カカシは言を続ける。

「手裏剣も使っていていいぞ。オレを殺すつもりで来ないと取れないからな」

「でも！危ないわよ先生！」

「そうそう！黒板消しも避けられないほどドンクセーんだから」

あっけらかんとして言うナルトに、若干の呆れの混じった視線を向けてつつカカシは言う。

「世間じゃさあ、実力のない奴に限ってホエたがる。まあ、ドベはほつといて、よいスタートの合図で…」

瞬間。ナルトが動いた。

右手を腰の位置のホルスターへと突っ込み、体を捻って投擲の体勢にシフトする。

捻った体が元に戻ろうとする力に逆らわず、勢いづいたまま手のクナイを放った。

しかし、

「そう、あわてんなよ。まだスタートは言っていないだろ」

一瞬でナルトの背後に回り込み、制圧を完了したカカシに一同は驚愕する。

仮にも上忍。自分達とは隔絶した存在である彼の実力を疑ってしまった過去の自分を呪いたくなる。

ハクトは、この試験の難易度の異常さに齒噛みする。

「でも、ま…オレを殺るつもりで来る気になったようだな。やっとオレを認めてくれたかな？」

そう、たとえ殺す気になったとしても成功率は限りなく零に近いだろう。

「じゃ、始めるぞ。よいスタート！！」

合図とともにハクトは鬱蒼と生い茂る木々へと飛び込んだ。

（どうしよっかなー、まともによっても取れるとは思えないし…）
ハクトは思考する。

明らかにこちらの仲間割れを誘発させる合格条件、上忍から腰元のスズを奪い取れと確実に不可能であろう難題。思考が加速する。

（となると、何か別のモノ…）

数多の条件を繋ぎ合わせ、あらゆる可能性を取捨していく。

（試験内容自体がブラフ、実際に試されるものを観察するための布石）

そこで、ある仮説に辿りついたハクトは絶望する。

（仲間意識、チームワーク、ねえ。無理じゃん…この面子じゃ）

そもそも、自分を含めた全班員に仲間意識など欠片も存在していないということを、ハクトは往々にして理解していた。

自分達を見限り単独でスズを取りにいこうするサスケや、罠に嵌って喚きたてるナルトの姿が容易に想像できる。

（どうしよ…。アカデミーに戻されるのはキツイ。いつまでも三代目のヒモになるのは御免こうむりたい）

現在、三代目の庇護下で生活をしているハクトは、半ばヒモのような存在である。

記憶を失って倒れていたハクトには、当然金などなかった。

アパートの賃貸、食費、アカデミーの入学費、その他諸々。

三代目は返済の必要はないと笑っていたが、それはハクトの吟じが許さない。

自分が忍びであったということを確信するやいなや、ハクトはアカデミーの門を叩いた。

忍びの任務は儲かる、それも任務の難易度と比例して段飛ばしに増えていく。

このことを火影亭勤務の男から聞きつけたハクトは、自分が忍びとして任務に就ける日を心待ちにしていた。

願わくば、さらに中忍、上忍と、できるだけ早く昇格し、三代目の為にこの里に尽くすのも悪くはないとも思っていた。

だが、ここにきて厄介な関門が立ちはだかった。

協力を要請しようにも、奴らは聞く耳持たないだろう。

（うーん、どうしょ。割とホンキで…。スズさえ取っちゃえばチームワーク抜きに合格にはなるんだろうけど、取れるかどうかは抜きにしてあんまり使いたくないんだよね、アレ）

カカシは泰然と広場に陣取っている。

不意に、ハクトの視界にオレンジ色のパーカーが映った。

「いざ、尋常に勝負！しょーぶったらしょーぶー！」

「あのさア、お前ちつとズレとるのオ」

ハクトは腹を抱えて笑いたくなるのを押しとどめて、熟考にしずむ。そこで、ある作戦を思いつく。

（ナルトがバカやってくれているうちに準備でもしよっかな…この際なりふり構っちゃられないしね）

懷から刀を取り出し、錆だらけのそれで地に何らかの図を描き出す。精確な円の中に、等間隔に斜線が引かれている。

ハクトはさらに図に何事かを印していく。

動作はどこか儀式めいていて、神聖でいて邪悪といった二つの相反する要素が闘ぎ合っているようだ。

一通り書き終えたハクトは、右足で図を十文字に刻んだ。

同時に、禍々しい何かが図の中央から出現する。

はたけカカシは向かってきたナルトを池へと突き飛ばすと、一息ついた。

この試験の真意、それはハクトの推測通りチームワークであった。子供とは正直なものである。

別段それは悪い事ではない。アカデミーでもそうやって教わってきたのだから、今まで幾度となくやってきたこのスズ取り試験であったが、通過したものは一人もいない。

皆我先にとスズを目指して沈んでいく。

言われた通りに物事をこなしてきた子供たちにとって、この試験は

鬼門と言えた。

今回も今までと同じ。そうなる確信がカカシにはあった。見たところチームワークなんて考えつくような連中でもなかった。良くて独断専行、最低で仲間割れ、とカカシは7班を評価する。

「へへーん！一人で無理なら今度は8人だってばよオ！」

池から計8人のナルトが、カカシ目掛けて飛び掛かる。

いくら増えたところで所詮はナルト、何の障害にもならない筈だった。

しかし、カカシの右前方の茂み、そこから現れたものによってその目論見は霧散する。

「よし、ナルトはそのまま纏わりついてよ。ボクが片づけるから」
現れたのはあかのめハクト、火影から特に気に掛けるように言われた白髪の少年だ。

特に何も問題はない。カカシは先日自己紹介の席でハクトを判断した。

そう、性格の面では。

現れたのはハクトだけではなかった。傍らに黒い何かを引き連れている。

腕だ。

明らかに人間の物ではないそれは、人の胴程の太さがある。

無数の関節を持つそれは可動域など無いようで、カカシに迫るその姿は蛇のようだ。

（これは…結構ヤバいな。火影様、気に掛けろってこういう事でしたか…）

第六感でその腕の危険度を感じ取ったカカシは、息咳切ってその場を離脱しようとする。

「逃がさないよ。カカシ先生」

地面から生えたそれは、長さの概念がないかのようにどこまでも伸び、執拗にカカシを捕縛せんとする。

一方、サスケはその光景に、自らの懸念が現実の物となったことを

確信した。

サスケは一つの疑念を抱く。

この得体の知れない同級生は何者なのか。

しかし、その思考は響いたアルトボイスによって中断される。

「サスケエ！サクラア！何やってんの！今がスズ取るチャンスだつて！」

確かにそうだ。

元々単身力カシに挑もうと思っていたサスケは、現在の自分が力カシの足元にも及んでいないことを確信していた。

ナルトが抑え込まれた一瞬。あの数コンマの世界において、力カシが乗り越えたであろう試練や積んできた経験の差を感じ取ったのである。

だが一人で無理でも奴となら、どうだろうか。

あの力カシが逃げ回ることしかできていない、この状況の異常さ。

今ならば、もしかしたらスズを取ることができるのかもしれない。

サスケは降って湧いたチャンスに柄にもなく胸を躍らせ、逡巡の後に共闘を選択した。

力カシは目の前の光景に目を丸くした。

何人ものナルトが自分を追いかけて、不気味な腕の合間を縫うようにサスケが蹴りを放ってくる。

こちらが反撃しようとすれば、拙い手裏剣術でもってサクラが援護する。

これまで何組もの班をアカデミーへと送り返してきた試験の合格条件を、目の前の新米忍者達は満たしていた。

力カシはこの状況を作り出した忍びに視線を移す。

足は絶え間なく地面に図を描きしるし、その右手はこちらの動きに合わせて目まぐるしく変化している。

可愛らしい顔は此方に向き、ニタニタという表情を浮かべている。

勝負は貰った、とでもいうように。

自らが受け持つ初の生徒達の雄姿に、戦闘中にも関わらずにカカシは相好を崩した。

そして、カカシは呻吟する。勝ってしまっただろうか、と。間抜けなイメージの抜けきらないカカシではあるが、彼もまた木の葉の誇る精鋭、上忍である。

確かに、ハクトの使役する腕はやっぱり極まりないが、どうやら腕の操作中彼は動けないようだ。

今も忙しなく動く右手や足がそれを物語っている。

それならば、本体へ直接攻撃を加えることでこの腕は消滅、あるいは停止する筈だ。

この包囲網から抜け出し、ハクトに一撃加えてやることなど、カカシにとっては造作もない。

しかし、ここは一つ勝たせてやるべきではないのか。

カカシの考えが揺れる。

可愛い教え子達の初の共闘なのだ。記念すべきそれを勝利で飾らせてやるのも大人の務めではないか、と。

しばらくの自問自答の後、カカシは答えを叩き出す。

やはり、自らの尊厳を保つ方が大切であると。

迫りくる蹴りを上体を仰け反らすように受け流す。

カカシの進路を塞ぐように構えた腕を、ナルトの影分身を盾にやり過ぎ、10メートル程の距離を一息に詰め、ハクトへと肉薄する。突如として現れたカカシに、ハクトは腕を戻して撃退しようと足掻くも、カカシの前では遅すぎた。

首筋に手刀を叩きこまれ、昏倒する。

ハクトの指揮から離れた腕は、先端から毒々しい瘴気を撒き散らしながら消滅した。

ハクトの戦闘不能によって隊列の乱れた班員に、カカシは音もなく背後に移動し昏倒させる。

全員が地に倒れ伏したことで、カカシはふう、と息を吐いた後、や

おら口を開いた。

「お前ら、全員合格だよ」

青かった空は朱に染まり、淫色の鴉が空を飛び交っている。

その喧しい泣き声で、うずまきナルトはむくりと体を起こした。

未だ混濁する意識の中、ナルトは試験中にカカシに昏倒させられたことを思い出した。

ハッ、として周りを見渡すと喜色を浮かべたカカシの姿と無然とした表情の7班の面々が居た。

ナルトに気付いたカカシが声を掛ける。

「おっ、起きたか。ナルト」

「それより、試験はどうなったんだってばよっ!!」

カカシの腰の位置に視線を向けたナルトは、顔を屈辱で染め上げた。キラリと光る三つのスズが、そこにはあった。

自分達が四人がかりでも取れなかったということだ。

しかし、ナルトは自分が妙な満足感を感じていることに気が付いた。今までいがみ合ってたばかりだったサスケとの共闘。

あの流れるような戦闘の最中、ナルトは仲間たちと幾度となく目線で会話をしていた。

自分が突っ込むと同時にサスケが後退する。カカシの攻撃に当たりそうになった時、ハクトの腕やサクラの手裏剣が援護をくれた。

途中からはスズの事など忘れ、全員でカカシを倒そうとしていた。

自分が笑っていることに気付いたナルトは、それでも笑みを止めることが出来ずにいた。

笑いは伝染し、しばしの間演習場に笑い声がこだました。

こちらに満足気な顔を浮かべたカカシは、やおら口を開いた。

「お前ら…、全員ごーかつく」

ハクト以外の頭に疑問が浮かぶ。

「えっ、でも結局私達スズを…」

サクラが疑問を呈す。

「ま！この試験の意味はそこじゃあ無いからな。なーんかハクト君は分かってたみたいだけど」

「まあ、与えられた条件を考えたらね。スズ取り合戦はブラフで本命はチームプレイってとこかな。途中からスツカリ忘れてたけどね」あの試験に隠されたスズ取りの真意を見抜いたハクトに、カカシは目を細めた。

「そんな所だ。よし、第7班は明日から任務を開始する！！」
任務と聞いて、ナルトの顔がパツと輝く。

「やったつてばよ！！これでオレも忍者だあ！！」

「よーし、第7班結成記念に飯でも食べに行くか！」
そういえば朝から何も食べていなかった事実を今更ながらに思い出し、三人の腹が鳴った。

「もちろん奢りだよね？」

すかさず切り返したハクトに、カカシは苦笑した。

「お前。さすがにここはそういう流れだつて、オレもわきまえてるよ」

「オレさ！オレさ！一樂のラーメンが食べたいつてばよ！」
一行が去った切り株の影。

未開封の弁当が、雑然と積み重なっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4880y/>

NARUTO～月の中には白ウサギ～

2011年11月17日19時21分発行